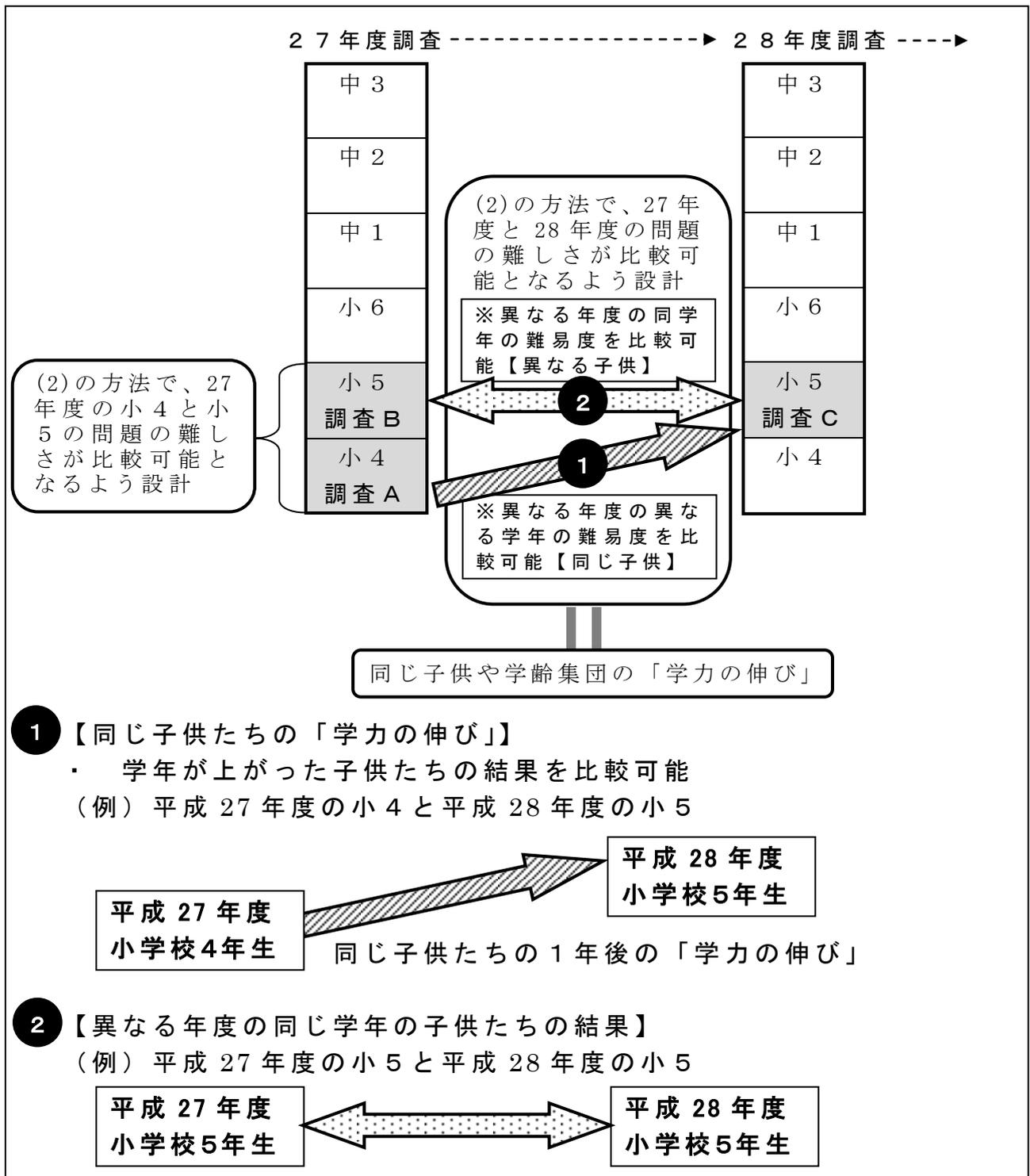


(3) 埼玉県学力・学習状況調査の設計

(1)、(2)にもとづき、本調査では、以下のような調査設計により問題の難しさを比較可能にして、それに応じて学力の経年変化(伸び)を見ることとしている。

調査の設計【イメージ】



(4) 本調査における「学力の伸び」の捉え方

児童生徒は、学年が上がることで新たな知識などを身に付け、確実に「成長」している。本調査では、その「成長」の中でも、とりわけ、以前と比較してより難易度の高い問題に正答できる力を身に付けることを「学力の伸び」と捉える。

例えば、ある児童が、小学校3年生の学習内容で、 $12 \times 6 = 72$ という「整数のかけ算」の問題を正答し、次年度の調査で、 $91 \div 7 = 13$ という「整数のわり算」の問題を正答できたとする。

この児童は、学年が上がり、学習指導要領に基づき「わり算」のやり方を学んだことにより、 $12 \times 6 = 72$ と同じくらいの難易度の「わり算」の問題に正答できるように「成長」したということになる。

一方で、同じ児童が小学校4年生の学習内容で $0.5 + 21.5 \times 6 = 129.5$ の「小数のかけ算とたし算が混ざった」、整数だけのかけ算・わり算より難易度の高い問題を正答できたとする。

この場合、昨年度と比較して、より難易度の高い問題に正答できるようになったので、本調査における「学力の伸び」と捉える。

「学力の伸び」の捉え方【イメージ】

